琉游舎

アトリエ琉游舎だより 149号

アトリエ琉游舎 ryuyusha.com/
琉游舎for healing https://toi101izuru.wixsite.com/mysite-3

2023年3月15日発行

暑さ寒さも彼岸まで

○彼岸は年2回、秋と春に巡ってきます。春分の日と秋分の日を彼岸の中日と呼び、その前後三日間が彼岸です。中日には太陽は真東から昇り真西に沈み、昼の長さと夜の長さが12時間づつで等しくなります。彼岸は季節的には1年の周期の大切な節目の日なのです。

○「暑さ寒さも彼岸まで」とよく言われますが、実際の平均気温にたとえると春の彼岸は概ね11月下旬から12月上旬の気温、秋の彼岸は5月下旬から6月上旬の気温とほぼ同じであり、それぞれ晩秋と初夏の平均気温と等しくなります。春秋彼岸の気温差は約10度以上もあります。

○寒い冬も暑い夏もいずれ時期が来れば（彼岸を過ぎれば）去って行くとの意味が転じ、「辛いこともいずれその時期が来れば去って行く」という意味の諺に使われることもあります。人は忘れやすい生き物なのか、それとも順応性が高い生き物なのか？どちらなのでしょう。

○彼岸は元来は仏教用語です。pāramitā （波羅蜜多）を漢語に意訳した「到彼岸」の略です。彼岸に到ることは悟りの境地に到ること。彼岸は涅槃とも呼ばれます。私たちの生死観では彼岸や涅槃は肉体的な死後の世界を指します。生きているこの世界は此岸です。此岸から彼岸に渡す仏様の導きが「度する」ことです。仏教徒は仏の「度する」ことにあずかり、自らの到彼岸を確信するために、仏の言葉を信じ日々の行いに励む人々のことなのです。

○今年も琉游舎では春の彼岸会法要を行います。彼岸会はなくなった方を供養し墓参りをして先祖を偲び思いを馳せる日と思われますが、私の考える彼岸は死後の世界を思うのではなく今、この日々の中で自分なりの安らぎの処（彼岸）を思い、そこに安らぎの処を見いだす日です。「暑さ寒さも彼岸まで」のその先にある「暑さ寒さもありのままの毎日」と心にとどめる日になればと思います。琉游舎の彼岸会法要でお待ちしています。

3・4月スケジュール

月	火	水				
			16 映画会 13時半	17	18	19
20	21 彼岸会法要 11時	22	23 映画会 お休み	24	25	26
27	28 読書会 13時半	29	30 映画会 お休み	31	4月1日	2 写経会 13時半
3	4	5	6 映画会 お休み	7	8	9
10	11 読書会 13時半	12	13 映画会 13時半	14	15	16
17	18	19	20 映画会 13時半	21	22	23

彼岸会法要
3月21日（火）
春分の日
11時から

写経会
4/2(日）13時半

読書会
3月28日
4月11日
（火）13時半

狂言綺語…生きているからこそ

琉游舎
Ryu Yu Sha
Place to pray, play and progress

3月に入って畑の土壌がさらさらとしてきました。冬の間は霜柱が立ちそこに日が当たると溶けて少しぬかるんだ状態になっていたものが、土中の水分を凍らせるほどには気温が下がらなくなり、表面は乾き、内部はしっとりとした耕しがいのある畑になってきました。そうなると今度は雑草も勢いづいてきます。また草むしりとのいたちごっこの始まりです。昨年は大根や白菜の収穫時期に発病してしまい、収穫や保存は妻に任せっきりとなりました。キムチを大量に漬けることと、しもつかれを作ることが目的だったのですが、今冬はすべてキャンセルです。術後三ヶ月は上半身に力を入れたり胸を開いたりする動作は厳禁とされていたため、鬼おろしで大根のすり下ろしができなかったことは単なる言い訳で、実際は寒風の中、土に埋めた大根を掘り起こして洗うという作業をする気にならなかったことが大きな理由です。美味しいものを作って食べたいという欲求より、暖かい部屋でぬくぬくと過ごしたいという怠惰な肉体が勝ったということでしょう。

春の空気はそんな怠惰な心身を吹き飛ばしてくれます。3月に入り土中に保存していた大根を掘り起こし、切り干し大根を作り、畑を耕してジャガイモの種を植え、雑草取りも始めました。冬期はほったらかしで荒れるに任せていた畑に少しづつ人の手が入り、夏野菜の栽培に向かって準備が整っていくようです。温かな空気と畑の整備と軌を一にして、私の心身も術後の寒い期間の分離状態から次第に合一に向かっている実感を覚えます。私の「信」を支える「心」と「行」を支える「身」が合一して信行一致の再始動です。

「日蓮といゐし者は去年九月十二日子丑の時に頸はねられぬ。これは魂魄佐土の国にいたりて、返年の二月雪中にしるして、有縁の弟子へをくれば（中略）未来日本国当世をうつし給う明鏡なり。（日蓮という法華経の行者は、去年の九月十二日の深夜に頸を刎ねられた。そして、この開目抄は日蓮の魂魄が佐渡の国に到着して、その翌年の二月、雪深い中で著わし、親しい縁に結ばれている弟子たちへ送るのである（中略）これは未来の日本国、つまり今の末法の世を映し出す曇りなき鏡なのである）」注１日蓮聖人の最も重要な著作「開目抄」の一説です。度重なる聖人の諫言に怒った鎌倉幕府に捕らえられ、滝ノ口の刑場で首を切られる寸前で佐渡へ島流しとなり、そこで開目抄は書かれました。いわゆる滝ノ口の法難と呼ばれる事件です。伝承では聖人が首切りの座に据えられた時、にわかに雷鳴が轟き刑吏が振り上げた刀に感電して折れてしまい処刑は不首尾に終わったところに幕府の使者がきて処刑は中止、佐渡への流罪になったといわれています。聖人には何か超人的な法力がありそれによって救われたと絶対視する向きもありますが、それよりも本人が自らの書で首をはねられ魂魄だけが佐渡にたどり着いたと記している真意を正しく観ていくべきでしょう。彼はここで、身体がこの書を書かせたのではなく、彼の肉体はいったん失われ、その魂（心）だけが佐渡に飛んでいき、魂がしたためたと語っています。そしてそれは未来の日本のあるべき姿を映し出す指針であると弟子たちに宣言しているのです。何という凄まじい言葉でしょうか。この書は自らの再誕の宣言です。そしてそれを「開目」と表現しているのです。彼は心身の分離を契機に彼だけの信行に開目したのです。

私たちは日蓮聖人を法華経の行者、信行一致の実践者として尊敬し宗祖として崇めてきました。しかしその信行一致を私たち自身の生きる社会と日々の生活の中に当てて咀嚼し実践することを怠ってはなりません。宗祖を崇めてその行為を真似たりその言葉を頑なに守ることはややもするとひいきの引き倒しになりかねません。それは「信」ではなく「盲信」です。彼の生きた社会環境が彼だけの独自の信行一致を導き出し規定してきたのですから、それは彼の生きた時代のものであり彼自身のものです。「信」はその中から観念としての普遍性を抽出することは可能かもしれませんが「行」は社会から超然とした「信」の原理だけでは実践は不可能なのです。滝ノ口の法難以前の聖人の信行はその身体に規定された、つまり社会構造や念仏が席巻する当時の宗教状況の中での信行です。その信行は滝ノ口の首の座に引き出されることで、社会と時代から解放されたのです。彼の魂魄（心）は、身体から分離された瞬間に自由を獲得し、私たちは彼の「信」を永遠のいのちとして今に到るまでありのままに受け取ることができるのです。その瞬間が日蓮聖人の再誕、開目の時です。その時聖人の「信」は普遍性を獲得し、今私たちもその一端に与ることができるのです。

日蓮聖人と私の信行一致は言うまでもなく同一ではありません。また彼の信行を忠実になぞる必要もありません。それでは宗祖の教えを信じていないのではないか、尊敬を失しているのではないかと思われるかもしれません。しかしその批判は当たらないのです。聖人の信行の歴史的事実が私の日々の行いに影響することはありません。必要なことは私の行いの実践がしっかりと「信」に支えられているかを自覚できるかです。そこに確信が持てなくなったとき、私は頸をはねられ魂魄が佐渡に至りしたためた聖人の「信」に立ち返れば良いのです。そしてそこからまた私の「行」が歩み出します。それが信行の日々を生きることなのです。私たちは聖人が心身の分離を自覚して獲得した普遍的な「信」のありのままの姿をありのままに受け取りありのままに行うことができるからこそ、日蓮聖人の信者であり教えのいのちを繋ぐ僧侶たり得るのです。

滝ノ口の頸の座で心身の分離を自覚した聖人が、そこから獲得した「信」の普遍性を支えに新たな歩みを始めた信行の道と、私の再誕後の道とは歴史的事実や事態の切迫感からは比較の対象にもなりません。しかし私だけに可能な私だけの信行一致の道を歩むために、私は手術後の再誕と心身分離からの再合一の過程を通して、新たな「信」を獲得することができました。それは「生きているからこそ」という「信」です。この「信」を支えに私だけの信行一致の日々が再始動しました。

注１：開目抄

琉游舎：戸井　出琉・恭子
問い合わせ：0287-53-7848　08033508152
矢板市大槻2319ー17コリーナ矢板Ｃ－８５０
メール：toi101izuru@outlook.jp